



四層

電子複写不可



防衛研究所図書館

部外秘

戰 史  
沖 繩 作 戰

( 第 一 部 )  
( 第 二 部 )

保安隊幹部学校

部外秘

(目次)

第一部

(頁)

第一章・アメリカ軍の沖縄作戦の準備

第一節・(戦略決定) ..... 1

- 其のの一、 作戦前の概況 ..... 1
- 其のの二、 台湾攻勢の着目とその変更の経緯 ..... 2
- 其のの三、 沖縄攻勢の決定とその戦略的意義 ..... 4

第二節・沖縄の特性 ..... 5

第三節・(アメリカ軍の知得せる情況) ..... 7

第四節・(作戦計画) ..... 11

- 其のの一、 計画の基本的特色 ..... 11
- 其のの二、 アメリカ軍の戦力編組 ..... 12
- 其のの三、 沖縄攻勢の計画 ..... 16
- 其のの四、 心理戦と軍政 ..... 22
- 其のの五、 攻勢の進行 ..... 24
- 其のの六、 攻勢の予行演習 ..... 28
- 其のの七、 攻撃の準備 ..... 29

第二章・アメリカ軍上陸の間に於ける日本軍佐として、  
32Aの状況 ..... 31

第一節・(32Aの編成) ..... 31

第二節・(作戦準備) ..... 31

- 其のの一、 第一期作戦準備 ..... 31
- 其のの二、 第二期作戦準備 ..... 35
- 其のの三、 第三期作戦準備 ..... 40

第二部

第一章・アメリカ軍の沖縄攻勢 ..... 56

第一節・(事前制圧作戦) ..... 56

- 其のの一、 概要 ..... 56
- 其のの二、 敵戦力の事前制圧 ..... 56

第二節・(慶良間諸島の攻勢) ..... 60

第三節・(攻略目標の軟化) ..... 65

第二章・3月23日～3月31日の間に於けるオ32軍  
の状況 ..... 70

(1)

## 第一部

### 第一章

#### アメリカ軍の沖縄作戦の準備

##### 第一節 戦意決定

其の一【作戦前の概況】 米山作戦—沖縄作戦計画の総称と呼ぶ—は、合衆国の太平洋に於ける長期に亘る戦意の遂行途上その進展段階に一大飛躍を敢行するものである。真珠湾より沖縄へ、それは実に約先相隔つ4,000哩、交戦史に三年有餘の過程を経て、回顧すれば、1942〜3年はアメリカ側は日本軍を一旦内懐ろに入れ次で反攻攻勢を起した時期である。やがて1944年には圧倒的戦力を結集し、島から島への激戦を反復しつつ、日本軍をその内方防衛線に向ひ急速圧迫した。

連合軍の進攻は二つの巨きな谷をもつて遂行された。一つは中部太平洋を、他の一つは南及南西太平洋を通じて、海軍の諸機動部隊及びその他は所要に依り適時この西方面の作戦に參與した。その成果は日本陸海軍に対する不断の圧迫となつて表われたものであるがこれこそアメリカ戦意の主眼である。

1943年末頃中部太平洋のタラワ、マキン及びアパママを攻めし諸方面からギルバート諸島を衝き、かくて1944年1月31日に於けるマーシャル侵攻の途を拓いた。アメリカ軍はケエゼリン、マジユロ及びエニウェトクを奪取し艦隊及航空部隊を前方に推進した。同時頃空母艦隊はトラック島を強襲しカロリン諸島における敵海軍基地は屏息するに至つた。サイパン、テニアン、グアムは、1944年夏アメリカ軍の手中に陥し、巨つフィリッピン海の第一次海戦に於いては、西進するアメリカ艦隊を阻止せんとする日本艦隊に対し重滅的打撃を与えた。9月10日の頃アメリカ軍は投錨地と艦隊前進基地を設定するため西部カロリンのウルシーを占領し、またフィリッピン群島に近いパラオ諸島のアンガウル、ペリリュー

(2)

島を占領した。此の南東方及南西太平洋方面のアメリカ軍はソロモン、ニューギニア及びフィリピン群島南端のミンタナオ島に向い進軍を継続した。前記方面の日本軍はアーデンビル、ニューアイランド、ニューブリテンにおいて無力化され孤立無援に陥った。1944年5月にはニューギニア北東沿岸のワクテの占領に次でビク、ノエムフルを奪取した。夏季の候日本軍の一部は濃霧ニューギニアのウエワクから突破を試みたるも失敗に帰した。9日に入モロタイの占領によりアメリカ軍はミンタナオ島へ300哩以内の地帯に進出することになった。(附図ヲ1)

其の二【台湾攻畧の着想と変更の経緯】太平洋方面に作戦せる海軍参謀部は1944年の大部を通じて1945年春に決行予定台湾攻畧(Operation Causeway—瀛地通過作戦)の計画立案に事した。即ち1944年3月の統合参謀本部(Joint Chiefs of Staff)の指令に基づき本作戰の一般概念及び作戦参加部隊に関する考究を海軍三に互に検討々議を加へ、協力艦隊指揮官の任命も発令され8月23日には台湾攻畧作戦計画に関する統合参謀部(Joint Staff)の(註、太平洋方面陸海連合作戦のための)の研究案が公表されるに至った。

米太平洋艦隊司令長官兼太平洋方面司令長官チェスター・W. ニミッツ提督が中南部フィリピン攻畧完了に伴い台湾攻畧の企図を拒絶しありしことは事實である。而して台湾攻畧に次で琉球及び小笠原諸島或は支那沿岸に対する作戦が実施される予想であつた。戦経路の何れなるやを問わず終局の目標は日本本土の攻畧であつた。

9月15日統合最高統帥部(Joint Chiefs)はマクアース・マックアーサー将軍に対して、ミンタナオ島を側方通過して既定計畧の12月20日を10月20日に繰り上げてレイテ島を攻畧すべきことを命令した。同時にニミッツ提督はヤップ島を脇通過すべきことを指示した。その翌日ニミッツ提督は台湾攻畧に就いて再考し、作戦変更を就て次の如き新案に想到した。即ち中部フィリピンの東

(3)

攻畧に伴い、そこに艦隊泊地を設定せば台湾や支那沿岸を経ずして直路日本本土に向い北進し得る可能性あるべしというのが提督の見解である。そこで台湾作戦の目的—台湾に設定すべき航空基地より日本本土の爆撃や、対支協力によつて日本本土を南す資源より遮断する—と前記変更案の可能性に就いて再考し、此に就いての意見を令下陸軍指揮官に対し書面で要求した。

アメリカ太平洋方面陸軍司令官ロバート・リチャードソン中將は前記に対し次の要旨の意見を呈出した。此等の跳躍的の徑路をるものは單するに最終目的即ち、日本本土の攻畧を迅速ならしめるということに主眼を置いて決定せらるべきである。この見地からすれば、日本本土への進攻の飛石として台湾と支那沿岸を経由する案はその所要時日と絶大な努力に対し之を償ふべき利点を発見し得ない。寧ろ経済的な代案として、ルソン—琉球及びマリヤナ—小笠原の二大斧を以てすべし。マックアーサー将軍のレイテに次でルソンを攻畧せんとする方策には全面的同意を表する。蓋し、ルソン占領によりフィリピンに海軍基地を設定せば、支那海の航路を封殺し同時に台湾を無力化し得るからである。ルソンの野戦基地より航空活動によつて琉球の攻畧を達成することは可能であり、更つ望ましいことである。小笠原の攻畧は、日本本土空襲のためマナリア基地よりする進航路を更に一本拓くことになる。日本本土に対する空襲激化はやがて日本本土に対する上陸の實現をもたらしに至るであろう。

太平洋方面陸軍航空司令官ミラード・F. ハーモンド中將はその返論に於いて更に同中將よりニミッツ提督に提した書翰に高達し、台湾及び支那沿岸に対する上陸よりは日本本土に対する爆撃基地たる琉球を攻畧するを優れりとの意見を再び強調し且つ台湾攻畧の目的が航空基地の獲得である限り同一目的を達成するに人員資材の犠牲を最小ならしめ得べき琉球攻畧を遂行すべきであると力説した。

台湾作戦の陸上軍指揮官に予定されていたシモン・B. パッター中將(オノ軍司令官)の意見の主旨は、台湾攻畧に關し、根本的及討論にして同中將はニミッツ提督宛の書翰で補給の不充分なるこ

(4)

と及び太平洋方面にあるサーブイズ部隊を以つてしては台湾攻戦は不可成であると述べ、更に一週間後にこれに追加して曰く、若し、ルソン攻戦が計画上に予定せられありとせば台湾攻戦は不要であると述べている。

ニミッツ提督は前記の諸意見をアメリカ海軍最高指揮官アーネスト・J・キング提督に報告した。キング提督は元來台湾攻戦の主唱者であるが、1944年10月2日統合参謀本部に対し、次の如き意見を具申した。即ち台湾攻戦遂行のために太平洋方面の作戦資料は不十分であり、しかも陸軍省当局は、欧州方面の作戦の終結を見るまでこれを増強し得ない状況である。台湾攻戦より先に、ルソン、青島、硫球に対する作戦を連続的に遂行すべきである。欧州及太平洋方面の状況好転によっては後日台湾攻戦の可能性も期待し得るとあるべし、と。

其三(沖繩攻戦の決定とその戦術的意義)

1944年10月3日統合参謀本部はニミッツ提督に対し1944年3月10日までに1個またはそれ以上の據点を占領すべきことを命令した。越えて10月5日ニミッツ提督は各下諸隊に対し次の指令した、即ち今や台湾攻戦は次の如く変更された。マックアーサー將軍の1944年12月20日ルソン攻戦について、太平洋が力軍は1945年1月20日に硫黄島を、3月1日には硫球に據点を占領せんことを企図す。

新策定の琉球攻戦はルソン及び硫黄島攻戦のため戦術的に制約を受けるものである。南西艦隊はレイテ攻戦に伴い12月に於けるルソン攻戦のため引続き北方に向う進攻を実施し得べく1月におき硫黄島攻戦に次いで更に進攻遂行によりマリアナよりするB29日本々土襲撃に協力する戦斗機隊のための基地獲得を期待し得るに至るべし。かくて3月に至り沖繩は不後の支那本土或いは日本の何れに於ても攻戦遂行線上に位置する状である。かく考察すればルソン—マリアナの線から一帯に琉球—小笠原の線に躍進する

(5)

は、封鎖と爆撃とをもつて日本の軍率力又はその抵抗意志を蕪滅せんとする一般戦術の骨幹を体して策定されたものと言ふべきである。かくして日本々土は琉球を基地とする中爆撃の爆撃圈内に入り得べし。なほ沖繩には艦隊の前進基地を設定し得べし。従つてアメリカ海空軍はその基地より日本々土を攻撃し得るのみならず、空の封鎖を強化して本土諸島と南方派遣軍とを分断隔絶し、更にその基地は東支沿岸地域に対する進攻作戦にも協力し得る。文を要するに沖繩攻戦は九州次で工業的心臓部たる本州に対する攻戦作戦のため好適なる協力據点を形成するものと見るべきである。

二 沖繩の特性

[全般の概況] 琉球諸島の数は140個に上り、内住民あるもの30個、気温は16℃〜28℃多雨高温と相俟て夏季は高温、風季断風的に毎年5月〜11月には猛烈な台風あるを例とする。

沖繩群島は長い弧状の琉球諸島の最中央に位する約50の小島よりなり沖繩はその本島である。慶良間は沖繩島南西10乃至20哩あり。久米、渡名喜、粟國及び島は慶良間は北方に矩形状に点在、伊江島は本部半島の先端に近く、伊平屋島と與論島は本島北部に在る。沖繩本島南方の東海岸には、アメリカ軍により「東の島」と呼ばれて鎖状の群島がある。

沖繩群島は、日本潮流の潮流に當り、海水温度は珊瑚の發育に適し、島は何れもリーフに囲まれ往々数哩の沖合に及びものがある。沖繩は琉球群島中の最大の島で南北約60哩、幅25乃至18哩、面積485平方哩、四面にはリーフが圍繞する。

[沖繩島の状況]

石川地塊部以北の島の約三分の二の地域は、多くは松林に蔽われ、荒蕪山岳帯である。本部半島西北3哩半に伊江島がある。石川地

(6)

狭部以南の島の約三分の一の地域は波状の丘並立し、天然の斜面や峡谷によって掩して断絶地をなし、人口の三分の二を保有。数個の飛行場と那覇、首里、糸満、真那覇等の町がある。1944年に於ける総人口は435,000である。

沖縄作戦の主なる戦場はこの地区であつた。石灰質の高原や丘陵は防禦に適し、洞窟や墓は堅固な地下障地に改築し易い。一連の丘陵帯は東西に連立し、線は東西に走つていて北方より南進する軍隊の機軸は困難である。これらの丘陵帯は、人為の急斜面と俟つて自然の重疊防禦地帯を形成する。海岸附近は一面に稻田である。道路は北方地区に比すれば発達しあるも、那覇及びその附近を除けば自動車行には適しない田舎道である。排水設備は不十分で雨に際しては一面は粘土状の泥濘と化する。

西海岸波平南方は比叻川河口地区に互る約15軒の海岸中絶は磯決である。この海岸は河口附近の部落名に因み真知海岸と呼ぶ。この磯決には処々に絶壁、露頭、岩礁など低潮時には長さ100乃至900碼幅約10乃至45碼の障壁を形成し、高潮時は水面下に没する。海岸一帯にリーフや珊瑚礁頭が散在し、リーフ障壁と陸岸との中間の水深は外側海岸の低地は波状丘陵上より扇と射界が開けている。海岸から2000碼内奥に嶺谷及び嘉手那飛行場がある。砂辺東方に峰起する標高400碼高地は全海岸を制する。この地帯の絶壁や地隙は、軍の迅速なる行動を妨害し、これに対しては敵の行動遲滞のために利用し得る。

砂辺丘陵南方から平地帯一連の線に至る島の幅員は5500碼である。一帯は概ね平坦で東海岸の久場附近の高地は良好なる要地である。この附近の道路は日本側の軽車輛には適するも、アメリカ軍の重車輛にとつては不適である。東海岸の北方那覇半島、知念半島間は中城湾の沼地をなしアメリカ軍はこれを「アツカ」港と呼ぶ。那覇半島より南方那覇に至る海岸は狭小な平地帯。那覇附近より西方那覇に至る地区は広い平地である。

主要道路は那覇、真那覇を連接し、那覇は人口65,000を

(7)

首都である。また沖縄の主要港湾にして3,000噸級船舶の泊地に直する。西南方の小嶺半島には阿嘉唯一の施設を有する那覇飛行場がある。

那覇一帯那覇連帯の北方地区及び沖縄旧部の首里附近は島の南方地区に於いては最も岩石屹立する階梯状地形である。首里附近の制高点は、その南北地区並に海岸方向に對し歐制の利を占め、最高標高は757呎で、その附近一帯の丘陵は急斜面と峡谷と相錯し防禦に最宜の地形である。斜面は往々ゴツゴツの重疊断崖をなし、谷地は不規な殺線が錯雜し、遠視困難にして小部隊の抵抗や対戦車戦には好適な地形である。就中、浦添村の「断崖」は最も顯著な自然的防禦線である。西海岸の牧港飛行場附近より南西方那覇一帯上原を経て東海岸の津嘉郎に互る4500碼の防禦に適する線がある。首里附近據点障地の南方の地形は処々に急斜面を見るに過ぎず、一般に粗大にして若干の深い谷間があり、且つ道路は軍隊行動を容易ならしめた。島の最南端は石灰石の断崖に固まれた高原であつて錯雜する低地から屹立すること約300呎に達する。この高原の主峰は座喜味及び八重瀬谷は、北、東、西方共に近接行動困難である。東南海岸に沿い漆川より知念半島の東端に互る間は磯決であつて、嶺谷の階梯斜面及び西南方の高い丘陵から瞰制される状態にある。

### 第三節 アメリカ軍の知得せる状況

#### (1) 情報収集と空中写真の価値

敵及び沖縄に関する情報は数ヶ月に互る幾多の困難をもつて除々に獲得されたのである。日本が沖縄を奪取の耳目より遮断するや、この日本軍の戰術的内部防禦に関する軍事情報を入手し得ることは極めて稀であつて、その収集は困難であつた。一部の基礎的資料は太平洋島嶼作戦において獲得した書籍や傳書、既往の琉球社住者の部向、日本の刊行書籍などから収集した。データの大部分は空中偵察写真に於てのものである。併しこれは往々不完全且つ不充分にし

(8)

で殊に地形的研究、敵軍兵力やその実力判定に至つては、特に航空写真撮影上には、いくたの困難があつた。即ち撮影目標は航空基地より1,200哩の後方でありしこと、充當航空機はB29又は空母機を用い前者は高空に於ける小機尺撮影に在り、後者のためには空母攻撃を計画せねばならないのである。尚撮影区域の広大なること及び雲による妨害のため、地形や諸施設の研究資料を得る大機尺写真を整備することは困難であつた。アメリカ情報部で準備した作戦地図は、機尺25,000分1であつて地形や諸施設を明確に認識し得るものであつた。それは1944年9月27日から10月10日に至る期間に空中撮影せる写真に基き製図したので、1945年3月1日頃に軍隊に配付された。

撮影地域の不足、飛行高度の不齊、撮影時の雲の状態などのため、映像の輪廓の不鮮明なもの、または地図の基本的部分例へば首里地方高地附近の如きは、地形の細部を識別すること極めて不十分のものがあつた。1945年1月に入り3日、22日、更に2月28日及び3月1日に空中写真の補足撮影を実施し、その内1月22日の実施分は予想上陸地域に関し優秀な成果を収めた。空中撮影を補つため真珠湾から潜水艦を派遣し、沖縄全周の海岸の写真撮影に在りしめられたが該艦は遂に帰来しなかつた。

水路に関する情報資料は完全であつた。併しその正確度は実際の作戦を経て始めて確認され次第である。正確度を検討するため、日本側の公表資料を参照した。リーフ上の水深についてはソナートリップ地図によつて信頼すべき資料を得る日中に軍の使用にすることが出来た。

(2)【日本軍の兵力判断】

最初1944年10月に於ける敵の兵力判断は、2個師団と一戦車連隊を基幹とする46,000名に達するであろうと判断した。2月末における判断においても依然前者と変化はなかつた。而し前記の敵兵力算定は空中写真地図の精読研究と日本軍の標準的

(9)

を基礎として算定されたものであつて、敵軍兵力を確認するに足る資料的根拠は全然なかつた。

日本軍は1944年に沖縄へ4個の歩兵師団を派遣したものと判明し、これらはオ9、オ62、オ24及びオ28師団であると判断した。陸軍情報部はその内一師団—おそらくオ9師団—は1944年12月沖縄より台湾へ移動したものと判断した。1945年3月、アメリカ軍情報部は在沖縄日本軍を歩兵26個大隊を合む次の諸部隊であると判断した。

第32軍司令部	6,250
第24師団(三單位)	15,000~17,000
第62師団(四單位)	11,500
第44獨立混成旅団	6,000
故立混成連隊1個	2,500
戦車連隊1個	750
中口径野砲連隊1、迫撃砲隊2、	5,875
対戦車砲隊1、対戦中隊3、防空部隊	
航空基地部隊	3,500
補給建設部隊	5,000~6,000
海岸地上部隊	3,000
計	53,000~56,000

第9、第28師団の一部はおそらく沖縄本島に在るべしと判断された。在沖縄諸師団は第32軍に編成され司令官宮近中將の命令にありと判断された。上陸直前、輸送地境機隊に属する重砲隊の報告に基き日本軍の兵力を65,000名と判断した。砲兵及び戦車に関しては日本軍編成表に基き判定し砲兵は70mm以上の砲198門(150mm榴弾砲24門を含む)その他戦車砲及び対戦車砲(37mm~47mm)約100門を有するものと判断した。戦車に関しては「37」軽と「47」中戦車90台と判断した。また情報によれば250mmロケット砲を有する連隊の存在も判明した。空中写真の判断によれば沖縄には三月の敵軍の居る周辺地がある。



那覇を中心とするもの、渡良知海岸、東海岸の真那原〜中城港に沿つたもの即ちこれである。陣地設備から判断すれば前記の港に沿つたものもあり得べきことである。更に考へ得ることは、海岸の内方約3000碼の掩護地帯に適する地帯から上陸地区の両側に向い夫々1個連隊分、渡良知海岸の西方に1個連隊分、那覇北牧港に1個大隊分の兵力をもちつて同時に進襲することも可能性なしとしない。さて之を要するに、2個師団は沖縄南部に配置されているものと判断される。

砲兵配置は概ね2個の集団となり、一群は読谷飛行場東方2哩の地区に、他の一群は首里真南約3哩の地区に在りて、その砲の位置は山腹や谷間にあり、河原や高地斜面のトンネル入口などにとり残されておる。掘壕土によって判定された。

沖縄の敵飛行場に同しては1945年3月末の情報に於いて、那覇読谷、牧港、嘉手納4個の作戦飛行場を認めた。就中前二者は僅かに残存している。何れも数多の対空砲及対地対空兼用砲を以て掩護されている。真那原滑走路は1944年10月には構築着手の状態であつたが、同年2月には廃棄された。また伊江島飛行場も3月中旬には廃棄されたものの如く、滑走路は濠をもつて切断されたのを知つた。

陸上基地の敵航空機に對しては脅威を感じなかつた。蓋しアメリカ軍は上陸実施に先だちこれらを無力化し得る確信があつたから。前記の如く、3月29日敵戦闘機及び輸送機が夜間嘉手納飛行場に飛來せることを知つた。3月31日沖縄飛行場には何れも活動の状態を認めなかつた。併し猛烈な空中攻撃が北方約350哩の九州から襲いかかつてくるであろうということは絶えず強調された。また決死的小舟艇を以つて船に対する襲撃を決行することあるべしと判断された。

第10軍司令部の判断によれば、作戦上最も危険なる地域は石川嶮と北谷一渡口の線との中間地区特に渡良知海岸と比羅川河谷を繋ぐ内方高地に在りとなした。即ち敵は設備せる1個連隊の陣地と比羅川南方高地の遊撃予備隊とをもちつてわが上陸海岸を防禦し得べく、他の控置部隊は数時間内に上陸海岸に到着し得べし。また敵は夜を待つてその砲兵配置を移動し得べしと判断される。なおア

刀側の上陸前に実施する準備的行動は恐らく日本軍に警報を与える

となり、上陸当日朝敵は準備せる逆襲陣地に1個師団を就かしむることもあり得べきことである。更に考へ得ることは、海岸の内方約3000碼の掩護地帯に適する地帯から上陸地区の両側に向い夫々1個連隊分、渡良知海岸の西方に1個連隊分、那覇北牧港に1個大隊分の兵力をもちつて同時に進襲することも可能性なしとしない。さて之を要するに、2個師団は沖縄南部に配置されているものと判断される。陸上基地の敵航空機に對しては脅威を感じなかつた。蓋しアメリカ軍は上陸実施に先だちこれらを無力化し得る確信があつたから。前記の如く、3月29日敵戦闘機及び輸送機が夜間嘉手納飛行場に飛來せることを知つた。3月31日沖縄飛行場には何れも活動の状態を認めなかつた。併し猛烈な空中攻撃が北方約350哩の九州から襲いかかつてくるであろうということは絶えず強調された。また決死的小舟艇を以つて船に対する襲撃を決行することあるべしと判断された。

#### 四 節 作戦計画

琉球攻撃作戦の計画は多くの点において従来の太平洋戦争のあらゆる作戦経験の教訓に基き考案されたものである。それはアメリカ軍が日本の外廓防衛地域に對する長い攻進過程に於いて体得した教訓一掃作戦綜合攻進威力の發揮、水陸両作戦の技術、日本軍の戦術とこれに對抗策等に関する教訓である。

氷山作戦計画の特徴は軍率カ一人、航空、艦船、飛行機一の綜合であり、それは過去3ヶ年の總計にも優る軍率カの結集を來すものである。本計画はかつて太平洋に用いられた地上、海上、空中戦力の大集中を以て日本帝國の内方地域に對する統合作戦を宣告するものである。

#### 一【計画の基本的特色】

アメリカ軍に課せられた一般任務は沖縄奪取、基地としての整備、琉球に於ける制空制海権の確保にある。この作戦は3段階に区別される。第1段階は南部沖縄（渡良知海岸及び渡良知海岸を含む）の攻進と初期に於ける諸整備作業とし、第2段階は伊江島攻進と北部沖縄の制圧、第3段階は不後の南西諸島の占領と整備の進捗に伴う南後の攻進準備である。作戦の目標日時は1945年5月1日である。

作戦計画の立案は1944年10月に着手せられ、同年太平洋方面最高司令官ニミッツ提督は、氷山作戦の一般計画を公巻した。戦術計画の骨子には次の如き三つの前提条件がある。即ちそのオ1は琉

前線に対する作戦は順順に進展し戦作戦に協力せる艦隊及航空隊の編成に充當し得るといふこと。オ2にはフィリピン作戦に参する部隊中所要の陸海軍部隊及機動部隊はマッカーサー將軍の命令で速かに沖繩作戦のために抽出費用せしめ得ること。オ3には本実行前に行わねば空中及海上作戦は充分なる制空下に実行し得ること。これらである。ニミッツ提督司令部が該作戦計画の骨子を決定するに當り、最大の喫緊事として強調されたことは実に空中勢力の優越という点であつた。計画立案者たちの判断によれば、アメリカの機動部隊及びマリアナ基地(硫黄島の占領と相俟つて)より実行する対日航空攻撃により敵の空中勢力は帝國の心臓部一本土諸島、支那沿岸、琉球一に集結するの己をなきに至らしむるであらう。故てアメリカの琉球攻撃部隊は前記の地域より絶えず強力な航空攻撃を受けることになる。この点においてか幸前航空作戦は單に攻撃目標の近のみならず九州及び台湾の航空施設を制圧又は破壊するを要するといふことにはあつた。如上の判断に基き使用し得るすべての機動部隊及び陸上基地航空部隊を挙げて如上の目的達成に邁進せしめ以て作戦地域の制空権を確保することとなつた。沖繩自体に対しては、該地の行場なるべく速に使用して陸上機を以て制空目的を達成し得るに上陸部隊の行動を律することに着意する。制空権に關しては、海軍及海上交通に対し潜水艦、海上及空中攻撃を以て之が確保を期す。

其の二 (アメリカ軍の兵力編組)

I. アメリカ軍の兵力

(1) 幸前航空作戦

沖繩を孤立せしめこれに対する各方面よりする救援を遮断するの作戦には、太平洋方面(POA)令下以外の陸上基地航空部隊は参加せしめられた。南西太平洋方面(SWPAC)令下の航空部隊はイテの状況許すに至れば速かに台湾に対する捜索及び攻撃に任ずる。支那及マリアナに任ずるオ20航空隊(Twentieth Air Force)のB29は上陸決行の前月、台湾、九州及沖繩に対し爆撃する。支那基地

オ20爆撃隊(XX Bomber Command)は攻撃を台湾に集中し、この間マリアナ基地のオ21爆撃隊(XI Bomber Command)は沖繩を襲撃し、次で沖繩戰鬥向は九州その他本土の有利な目標に攻撃を移す。オ14航空隊(Fourteenth Air Force)は支那沿岸の捜索に任ずると共に、屬し得れば香港を爆撃する。

(作戦計画と統制系統)ニミッツ提督令下の凡ての各種部隊は米山に戦に参加する(オ一表)

太平洋方面戦軍航空軍はカロリン、小笠原群島の敵航空基地の制圧し得れば沖繩及日本本土の攻撃、オ20航空軍の実施する対日攻撃に力戦機掩護等に任ずる。

中部太平洋前方軍は、その海軍航空隊を以てする潜水艦に対する掩護、制方通過によつて、とり残した敵航空基地の制圧、その他一般に戦後方業務に対する協力を任ずる。太平洋潜水艦隊は敵の海軍艦船に關する情報の収集、日本及台湾よりする敵水上艦艇の前進阻止に任ずる。後方兵站業務は、リチャードソン將軍令下の“太平洋方面アメリカ陸軍”(USAFPOA)、太平洋航空艦隊及サーブイス艦隊において処理する。之を要するに太平洋方面全般一東方はアメリカ西海岸より西方はウリズビーに亘り、南方はニュージランドから北方はアルバーションに亘る向一切の軍隊を挙げて沖繩作戦に参加せしめらるることになつたのである。

沖繩攻撃任務の主体は巨大なる陸海軍統合作戦部隊—中部太平洋攻撃部隊(Central Pacific Task Force)指揮官はオ5艦隊司令官海軍少將R.S.スファルアンズ—に課せられた。(オ2表)

スファルアンズ提督の統率する作戦軍は同提督直接指揮下の掩護隊並に特別群“オ50攻撃隊”—Task Force 50; 及“統合派遣軍”(オ51)攻撃隊指揮官ターナー提督)より成り、統合派遣軍の令下に派遣隊(オ56)作戦隊、指揮官オ10軍司令官バンクナー(陸軍中將)を屬す。本作戦における統帥指揮の關係は従来の如く日本々々より連絡せる地域におけるものとは幾多の兵において取置異なる。蓋し本作戦は

(4)

敵本土に近接せる広大なる島上に野戦部隊の戦斗に発展すべきを以て作戦の連続的段階における陸海軍両指揮官の指揮転移の関係を明確に規定すること緊要である。この点においてニミッツ提督は上陸作戦の当初に、スフォルアンス提督、ターナー提督、バックナー將軍に對し相互の指揮連繫の関係を規定した。而して次でスフォルアンス提督が陸役階の完了を確認するやこの時機以後、バックナー將軍は海岸附近の全部隊の指揮に任ずる。従つて該將軍は不後占領地の防禦及諸艦に關しては直接スフォルアンス提督に對しその責に任ずる。またスフォルアンス提督は適時ニミッツ提督からこれらの責務を継承し、バックナー將軍は琉球内の全作戦軍の指揮に任ずる。かくして將軍は在琉球一地上軍、海軍、空軍、寺備隊等全統合部隊を指揮し、新占領地の衝並整備及び距岸25哩以内の海上防衛に關し直兼“太平洋方面軍司令部(CINCPAC)”に對し責に任ずる。

スフォルアンス提督はオ57作戦隊(オ57作戦隊)及び空中機並対潛水艦隊のための“特別作戦群”艦隊後方勤務隊をその指揮下へ配属せられた。オ58作戦隊は日本空軍に對する制圧任務の大部を担し、その重母の艦隊は3月中旬九州、沖縄及其の附近の島々に對し空襲に任じ、上陸実行の一週前日に目標地域の東方海上において掩護配置に就き、空中攻撃と巡航とによつて上陸に協力し、九州及び支那沿岸に對する進攻を準備し或は敵の海上部隊の来攻に備ふる等の任務を担任する。英空母艦隊は当初アメリカ艦隊の作戦に参加し、上陸地前の十日間琉球南西の先島群島の制圧に任ずる。

“統合派遣軍”(オ51作戦隊)は沖縄及群島内の他の島嶼の攻撃準備に自ら直接任ずる。この派遣軍は、陸、海、空軍の統合部隊より成り、“派遣隊”(オ56作戦隊)(オ三表)とその船舶輸送機兩協働海軍並航空部隊等により編組せらる。オ51作戦隊に對し海軍並航空の直接協力はその令下にある“上陸支援隊”(オ52作戦隊)一搜索空母、砲艦、モーター艇、掃海艇、水中破壊班より成る一“艦隊並掃海隊”(オ54攻撃隊)一旧式戦艦、軽重巡洋艦、駆逐艦、海防艦より成る一に依つて担当される。“北部攻撃隊”(オ53攻撃隊)

(5)

“南部攻撃隊”(オ55攻撃隊)に屬する輸送船中トラック船隊は、その主力を以て沖縄主上陸部隊の揚陸に任じ、その一部は次善方面の上陸または海上待機部隊、方面軍予備隊用に充當された。オ51攻撃隊にはその他に輸送船団護衛、サーフェイス並救難に任ずる部隊及び特殊海軍部隊が屬された。

(第10軍の編成)

攻撃目標の攻撃に参加する諸隊は一口の野戦軍—“オ10軍”に編組せらる。軍司令部は1944年6月アメリカにおいて編成せられ尙もオアフにその司令部を開設した。司令官バックナー將軍は旧任地アラスカより転じて同年9月軍司令部の職に就いた。將軍はアラスカにおいて44年防衛任務を遂行し新軍司令部幕僚の大部はアラスカ時代の旧部下にして一部は歐洲戦場より帰還せるものである。

第10軍の基幹兵團はオXIV軍團及びオIII海兵軍團(海兵)である。オXIV軍團はオ7、オ96歩兵軍團より成り、軍團長ホッジス將軍はカタルカナル、ニュージョージア、ブーゲンビル、レイテにおいて日本軍を撃破した歴戦將軍である。

オIII海兵軍團はオ1、オ6海兵軍團より成り軍團長ゲイガー少將はブーゲンビル及びグアムにおいて戦勝を収めた。

オ27、オ77歩兵軍團及びオ2海兵軍團は特別任務または予備としてオ10軍の直接指揮下に在り。

占領地の防衛及び諸整備に任ずべき“戦術飛行機”及び“島司令部”はオ10軍の指揮下に配属せられた。

(参加兵力並兵團の戦歴)

本戦の上陸段階のために充當された總兵力は183,000名にして、内約154,000は7個の戦斗軍團(ニューカレドニアに配置されたオ81軍團を除く)に属する。この7個軍團はどれも野戦大隊、自衛隊、自動車大隊、統合通信中隊数個、多数の補給勤務隊を増加配属された。最初の上陸に任ずる5個軍團の總兵力は116,000

(16)

名である。オ1海兵師団(26,274名)及オ6海兵師団(24,311名)は協力補給部隊の他夫々海軍要護大隊及び約2,500名の補充兵を有する。

第7、第77、第96師団(夫々配属部隊を含む)の兵数は各々均約22,000名であるが歩兵自体の兵員は編成定数より約10%少ない。予備たるオ27師団は配属部隊を含み16,143名にして編成定数より約2,000名少ない。軍予備の海兵オ2師団は22,195名ある。

第10軍は前述の如く“盟”としては初めての作戦ではあるがその指揮下の軍団及師団は何れも琉球作戦前に歴戦の経験を有する。即ちオ24軍団はレイテ、オ3海兵軍団はグアム及びペリリュー、オ7師団はアッツ、クエゼリン、マーシャル、サイパンの戦闘に参加した。なおオ1海兵師団は太平洋の最初の作戦、即ちガタルカナル戦闘に加し爾後西部ニューアブリテン及びペリリューの戦闘を経ている。オ6海兵師団は1944年末に編成せられたるもその各師団の大部はグアム、マーシャル、サイパンにおける歴戦部隊である。オ2海兵師団はガタルカナル、タラワ、サイパン、ティニアン等の戦闘に参加した。

### 其の三 沖縄攻勢の計画

#### (1) 作戦計画策定要領

“太平洋方面最高司令部統合参謀部”(CINCPAC Joint Staff)の策定する計画に基き、各主要指揮官は自己の計画を策定し且つその命令を下達した。各計画及命令は夫々その上級司令部より示された処に準じ脈絡一貫する。統合作戦の特性はる軍の凡ゆる作戦及び後方方向を離して広汎な協同調整を必要とする点に存する。

統合会議を開催し兵力編組、船舶輸送、補給、戦術等に関して協力を遂げた。軍団及び各“作戦隊”(Task Forces)の指揮官は協同して上陸作戦計画を策定した。軍団や師団参謀部は方針決定や計画策定のため軍参謀部の協議や助言を受けた。海軍側及び海兵隊の幹部は協同調整を確保するためオ10軍司令部の一般並特別参謀部と連絡した。

(17)

作戦計画の某局面に於ては、或は前作戦の経験を活用し或は他の目的のために準備された計画の一部を流用したものもあつた。即ち海軍は某部は硫黄島作戦の体験に鑑み艦砲射撃の改善のため全般の指揮と協同組織を適正強化することが出来た。また“盟”の後方計画においては取り止めになつた台湾作戦のために準備された計画の内沖縄作戦のために適用し得る部分は、これを修正利用した。

かくの如く各種の手段を盡して作戦計画の策定を練り上げてゆくうちに本作戰の特性を把握し且つその視野を開展せしむる重大問題に到着した。即ち各方面から検討して見るとオ10軍の編成中に更に多くの戦闘協力部隊及び勤務部隊等約70,000名の増強を必要とすることを発見したのである。

#### (2) (主上陸地の選定)

“軍参謀部”は戦術上の判断並後方兵站業務の見地に鑑みオ一次主上陸地区を沖縄西岸真珠湖北に亘る地区に選定する策案を立てた。海軍側の参謀の主張によれば攻勢目標に対する艦砲射撃は1週間の長期を要し、これがため艦隊の給油並補給のため目標附近に掩護された泊地を必要とす。かくて主上陸1週前に沖縄西方の真長岡諸島を奪取するに次しオ77師団にこの任を課することゝなつた。またターナー提督の提言により沖縄東海岸に対し敢闘上陸を企図しオ2海兵師団をこれに充当した。軍予備に予定してあつた前記2ヶ師団に新任將を課するに至つたので新にオ27師団(派遣軍に控置せる方面軍予備)を海上待機予備となし、その代りにオ81師団を方面軍予備として南太平洋に控置することゝなつた。

#### (3) (上陸日時の決定)

第10軍は結局上陸日次を二面延期した。一面はルソン作戦の進展遅延により船舶運用に支障を来したると、更に一面は目的地附近の天候不良に因る。かくてL.D(上陸日次)は1945年4月1日に決定された。

各種の考察を要らした結果、沖縄攻撃計画は機動力、長射程、威力の統合戦力を最高度に発揮し得る作戦方策となつたのである。即ち外側に転ずる。モーター艇や砲艇等は、近距離やロケットを砲射し、上陸用舟艇の攻撃隊を海岸に向い誘導する。飛行機は全力をこめて協力艦艇隊を敵えて40mmを砲射しH時に及び、攻撃部隊が上陸を開始する後においても真地1,000馬地域と上陸隊の下に1-8日(3月24日)沖縄及び慶長間群島に対する作戦を開始する。これらの諸隊は艦砲射撃及び空中攻撃をもつて敵の防禦飛行場施設の破壊、目標附近の掃海、海岸附近の機雷その他の障礙物の排除等に任じ、海上及空中よりする敵の攻撃に対し、上陸兵団の航行を運送をからしめ上陸後に於いては海上より陸上作戦に協力し互に空中掩護等に任ずる。掃海隊は「上陸支援部隊」に先行し1-8日間の先頭をもつて目標海域に到着し先づ艦砲実施部隊の進路を掃海し上陸地附近及び取崩上陸地の掃海作業に任ずる。水中障礙物は掃海隊に統行し海岸搜索及水際障礙物の排除に任ずる。

④〔艦砲射撃〕

沖縄攻撃に協力する艦砲射撃は次の要領によつて実施する。即ちこれを大別すれば上陸日次の前週に行う破壊射撃、主上陸地域並に上陸地域に対する緊急なる直接支援射撃及び陽攻的の目標取換、敵射撃隊及びその他の協力射撃等である。

艦砲射撃の諸隊には、5-16インチ榴砲の艦艇を充て、何れも旧式艦船2隻、巡洋艦2隻又は3隻、駆逐艦4または5隻を以て成り、南部沖縄沖合の指定海面に進入する。攻撃地域を拡大にして目標の破壊困難なるに鑑み射撃目標の選定を慎重にしその重点は艦艇の対し危険を及ぼす防禦火力、飛行機並直接上陸を妨害すべき目標に向する。適當なる射撃目標の発見は、近距離よりする搜索、探索射撃、不斷の効果判定等に期する。支援射撃には以上の外、掃海、障礙物排除に任ずる砲艦、モーター艇などの火砲をも参加せしめ、

1日0600の艦砲射撃は火力を海峽に集中する。逆襲阻止及支援射撃を以て防禦火力と上陸点に向う敵の増援行動を制圧する。

の波状攻撃が海岸に近接するや巨砲火力はその目標を真地及び上陸隊の外側に転ずる。モーター艇や砲艇等は、近距離やロケットを砲射し、上陸用舟艇の攻撃隊を海岸に向い誘導する。飛行機は全力をこめて協力艦艇隊を敵えて40mmを砲射しH時に及び、攻撃部隊が上陸を開始する後においても真地1,000馬地域と上陸隊の外側に対する射撃を継戦する。但し攻撃部隊の火力要求に隨時優先的に之に応ずる。

H時-35分までの全ての計画射撃は「オ52作戦隊」指揮官の統率の下に実施する。爾後の射撃実施は上陸部隊の兵力大なる上陸作戦の拡大なるため、「北部並南部攻撃」指揮官は夫々その關係上陸部隊に依りて之を区別するものとする。「オ51作戦隊」指揮官は「軍艦隊」に対する実際の射撃指揮に任ずるの外、依然全般の協同を律し「第10軍」及「軍団」指揮官の承諾を得て爾後24時間の傷力損耗を指定する。

⑤〔航空協力〕

航空協力の大部は「オ58作戦隊」の直空母艦隊及び「オ52作戦隊」の護衛空母艦隊の担任する処である。直空母艦隊は攻撃目標附近に於ける上陸協力と戦闘機迎撃掩護のため従来その例を見ない長期の任務に就かしめられ、掃海隊掩護、艦砲射撃外目標攻撃、敵防禦並に飛行場施設の破壊、上陸作戦の掃射等に任ずる。護衛空母は直接協力射撃警戒、艦砲及野砲に対する目標指示、空中補給、写真撮影、宣伝隊指揮等に任ずる。1日以後には慶長間群島内に開設せらるる水上機基地及び上陸沿岸基地のオ10軍「戦術飛行隊」の参加を予期する。この後者は制空と地上部隊協力によつて該地域の空中掩護に當る。

凡ての艦砲射撃、航空協力、上陸部隊その他の地上砲火は緊密なる共同連撃の下に実施する。目標伝達の中核機関を軍、軍団、師団毎に開設し關係部隊に依する目標諸元の収集及通報に任じ且つ実施効果を統率する。下は大隊より上は軍に至る各級指揮官は、それぞれの協力射撃-野戦砲、艦砲、空中攻撃-とその行動区域における自己の火力

(20)

の進撃について意見を具申する。この協力火力の要求は各上級指揮官の承認を得て実施する。

(6) (作戦オ / 後援)

、作戦オ / 後援一慶良間諸島(伊弉諾島及び南部沖繩)の攻取一は艦隊並航空協力の下に開始せらるゝことになつたのである。即ち1-6日“西方攻取団”はオ77師団(配属部隊を含む)を慶良間に上陸せしむ。此の島の攻取目的は“統合派遣軍”のため沖繩本島に先づ艦隊補給基地、掩護泊地、水上機基地を獲得するに在り。二個の連隊戦闘団(Regimental Combat Team)は該群島の数ヶ所を同時に上陸し群島の南西部より北東方に飛石的に前進し1-1日に伊弉諾島を占領する。泊地設定を妨害する敵火砲は一切これを破壊する。各島の掃蕩戦をなさずして組織的抵抗を破壊せしむる。1500名の大隊を慶良間島に配置し主力の沖繩上陸に協力せしむる。かくて師団は1部をこれらの島に残置し師団主力は再乗船の上“オ1”の予備となり爾後の伊弉島攻取のために待機する。(附図オ6)

第77師団の慶良間攻取向沖繩本島に対する制圧作戦を開始し、日の近づくに従い高潮に達する如くする。即ち3月28日艦隊は掃海隊並破壊班に続行して同島に近接する。“北部及南部攻取団”は1日早朝西海岸に到達し11時-0830と暫定一それぞれ陸兵を揚陸せしむ。左翼“オII海兵軍団”は2ヶ師団を併列し比謝河口の渡真那北方地区に右翼“オIV軍団”は2ヶ師団を併列し、渡真那南方地区に上陸する。前記の4ヶ師団は北よりオ6海兵師団、オ1海兵師団、オ9師団、オ96師団である。爾後両軍隊は相連撃し島を横断前進する。オ6海兵師団は当初読谷飛行場を占領し次で比謝地狭一島の巖状部に向い前進し11/15日迄に北部海頭堡を占領する。オ1海兵師団は島を横断前進し次で東海岸の馬連半島へ東南進する。比謝河口より南方に逼る軍団作戦地境の南方地区においては、オ7師団は速に読谷飛行場を奪取し島を横断して東海岸に向い前進する。オ96師団は当初前面の高地一該高地はその南方及東南方沿岸を瞰制する一を占

(21)

て比谷附近の橋頭堡を占領し軍団の右翼を掩護し次で右翼を軸として西進前進し、11/10日迄に島の地狭部(久場一普天間の線に右翼を占領する。

(上陸海岸選定の経緯)

慶良間南北地区の上陸地域の選定はオ10軍司令部において、南部島の全海岸に關する研究と各種作戦案の検討とを経て決定せられたのである。太平洋方面最高統帥幕僚部においては幾多の案が検討せられ戦術的並後方兵站見地に基いて比較々置された。決定案は次の理に基き選定されたのである。即ちオ1は11/15日迄に所望の飛行場を獲得し得ること、オ2に攻取並行上揚陸作業を容易なること即ち狭小海岸は2個軍団とその協力部隊に充する甚大なる軍需品の揚陸を理し得る唯一の海岸である。従つてこの場合那覇港又は中城湾の泊地を占領が遅れるという不利は顧慮するを要しない。オ3に本案は敵の所在と離隔している。オ4に予期せらるゝ敵の最大抵抗線の反対側に連続上陸し軍隊を集結し得る。オ5に敵の上陸妨害の薄弱部に上陸し得る。最後に攻取協力のため最大の協力火力を期待し得る。

上陸後に於ける軍機動の考案は当初の目標たる島の南部地域を孤立せしむるに至る。即ち上陸地区北方の石川地狭を占領して北方よりす敵の増援を遮断しまた南方に対しては同時に久場東西の線を占領し南方よりす敵の増援を遮断する。かくしたる後徐々に南部地域一帯を攻取せんとするものである。地上作戦における機動の推奨は太平洋戦争においては今次が始めてのことであるが地上各級指揮官に対しは大いに機動を發揮することを要望せられた。この考案に基き地上軍団は速に島を横断し次で南方に転進し敵を断片的に破砕し堅固なる據点に対しては勉めてこれを迂回し最終に除に之を掃蕩せんとするものである。

(欺騙上陸)

西海岸に対する主上陸向、オ2海兵師団は東海岸において欺騙上陸



(2)

陸を突進する。この突進行動はし日に開始しし十日まで反復し、西海岸と共に東海岸へも同時上陸する如く進めしむるため、実際に行動する。爾後敵師団は攻勢師団を支援するため、オアフ島に上陸せしめる。オアフ島は洋上特機予備としてし十日以前に到着し、統合派遣軍司令部の命を待つ。該師団は東海岸の諸島占領を準備し次で本島への東海岸に上陸し、オアフ島に協力せしめる。

(9) (上陸不成功の対策)

西海岸に対する上陸計画の実行不能の場合には代案による。この代案に於いては、慶長島群島の占領に次いで同様に東海岸の中城湾口を扼する小群島を占領する。海兵又々師団を以て東海岸の知念半島と溪川町間の海浜に上陸する。海兵師団は爾後三日間、その附近の高地を占領し中城湾南部久場一與那原間に対するオアフ島軍団の2ヶ師団の上陸に協力する。この代案は上陸の成功を期すための最善を満ちすものではあるが、次等策たるを免れぬ。蓋しオアフ島の上陸は敵の予備隊より最大の抵抗を受くることあるべく、作戦の1段階たる敵全軍専破に要する期間を遷延せしむる虞れがあるからである。

其の四 心理戦争と軍政

(1) (対日心理戦の考察)

日本軍に対する心理戦は従来作戦に於ける不成果に鑑み、その果には憂慮があつたけれどもアメリカ軍は日本側の抵抗意志弱体化し絶大な努力を拂つた。情報部に於いては沖縄の空中散布のため、5700,000枚の伝單を準備し、又爆彈や砲彈により特殊地域に散布する伝單を百以上も現地で印刷しようとする計画もあつた。機を異えた戦車や超高機をのせた飛行機や、戦線の背後に投下し遠隔調整ラジオを以て敵兵に対し降伏勧告と降伏の仕方を呼びかけることを考案した。

(2)

心理戦争の推進には沖縄の特殊事情に即応せしめる如く留意され、この点に関しては確る素観的であつた。蓋し沖縄人は血統と文化とを異にし、國策主義、軍國主義に同調するよりは寧ろ監視の下に指導せられて来たので一般市民は敵対者としてではなく少くとも日本人は熱狂的ではなからう。というのがアメリカ側の判断であつたのであ

(2) (軍政)

本作戦においては軍事行政に関する問題を処理する事があつた。即ち住民を戦線より他方面に移動させ且つこれに保護を与えねばならぬが、これが馬には作戦軍の行動を容易ならしむると共に占領軍に対し力と現地物資の提供を容易ならしむる考慮を要する。

南部沖縄の住民は大約300,000人で、他の1,000名は島の北端や他の島々にあり、太平洋戦争においてもかくも多数の住民を処理するのはこれが始めてである。

占領せる島嶼における軍政行政は基本的には海軍の管轄に属し、ミッドウェー提督は沖縄提督というわけであるが、併し守備軍の主体は陸軍なるを以て提督はその責務をバックナー將軍に委任し、バックナー將軍は攻勢作戦の段階においては、その業務を戦術的に基く命令下指揮官を遣して統制に任せしめた。かくて軍団及師団の指揮官はその所在地域の軍政に任じ、戦線後方に軍政委員を配置し軍政並市民組織の業務を処理せしめる。

作戦の進展に伴い住民の増加するに至るべく、現地機関はオアフ島の政務部に属して管理業務を実施し、宿営地を設備し、島全般を統制する計画に基いて処理する。占領地守備の段階に至れば、全軍政委員は、バックナー將軍の指名する「島司令官」の令下に業務を遂行する。

軍政上差當りの重要問題はし十日までにアメリカ軍の戦線内に收容せらるべき約300,000人の住民に対する食糧補給と応急医療の措置である。各師団は出港に當り70,000人分の住民用食糧一現地

生産品に類する米、大豆、罐詰魚肉及医薬品を携行する。  
 軍政要員は所謂「災難救助」なる甚大困難なる任務を双肩に負  
 攻軍部隊に航行上陸することになっている。各種の増加補給は一  
 の常統補給の船舶補送内に包含されている。

其の五 兵站組織

(1) [甚大なる後方業務]

氷山作戦の計画及実施は、太平洋作戦に前例のない甚大なる輸送  
 給等一切の兵站業務の処理完遂を要したのである。攻軍部隊に  
 ものみでも人物183,000名と軍需貨物747,000容積屯を  
 30余隻の作戦用船舶及上陸舟艇に搭載輸送するを要した。その積  
 みはシヤトルからレイテに至る6,000哩に亘る11の港灣に於て  
 施されるのである。

上陸後に於いては、戦闘部隊の地逐次増加する守備部隊を合し  
 270,000名に対する常統補給を必要とする。尚同時に沖縄に艦  
 並海軍前進基地を整備して將來の作戦の進展地たらしむるために  
 初の上陸に引続き数ヶ月の長期に亘る補給及び建設作業を必要とす  
 攻軍遂行、戦力維持、守備部隊の輸送、不断の補給などの統合一  
 は最も喫緊の要時といふべきである。

距離の遠隔は後方兵站計画に最も重大なる影響を及ぼすもので  
 軍隊や軍需品はアメリカ西海岸、オアフ、エスピリットサント、  
 ーカレドニア、ガダルカナル、ルッセル島、サイパン、レイテに  
 て乗船搭載したる後、エニエトック、ウルスー、サイパン、レイ  
 に集合する。太平洋方面で目的地に最も近い基地はウルスーと  
 アナであるが、そこでさえ沖縄へは5日行程(1時間/10節)を要  
 のである。軍需品の補給請求の発註より目的地に到着するまでに  
 る日数を見るに、補給請求に応ずる準備と発送のために30日、  
 岸に於ける業務処理と積載に60日、目的地への航海に30日と  
 る。従つて計画立案者は最初の予定から目的地到着までに120  
 見込まなければならない。ということは、実際においては軍需部

の組織の決定及び戦術的計画の細部の決定に先立つて所要の兵站  
 の請求を提出しなければならないことを意味するものである。更  
 増大なることより幾多の問題がある。即ち所要船幅の増大  
 的処置の必要、無理な補給輸送、「挿団」輸送の採用等これ  
 である。

太平洋及南西太平洋に散在する軍隊をして所定の日時目的地に  
 達せしむるためその更船日時は厳守されなければならない。

氷山作戦に関する広汎な兵站に関する責務はニミッツ提督より  
 主要指揮官に指示された。ターナー提督は「太平洋艦隊上陸軍」  
 指揮官として攻軍部隊及補給に関する船舶輸送を担任し、その搭載  
 計画を策定し、上陸海岸に於いて人員及軍需品を交付する業務を担  
 する。バックナー將軍は合下軍隊の船幅配当、軍需品の積陸及集  
 所に至る搬送の責に任ずる。西海岸において大部の積込みを實施  
 する常統補給の搬送及近領地守備隊の輸送は「太平洋方面最高指揮  
 官」が督掌する。全軍に対するオ/次補給及爾後の補給は共に太平  
 方面陸軍指揮官の担任とする。而して、「艦隊海兵部隊」太平洋艦  
 隊航空隊「勤務隊」及び「太平洋艦隊」の航空部隊等の各指揮官は  
 陸隊、海軍、海軍航空部隊のために天々の兵站業務を担任する。  
 太平洋及び南西太平洋方面より発進する諸隊に対するオ/次補給  
 大々当該方面指揮官の担任とする。

オ/次補給計画中には作戦資料(整備)の特別品目表を掲げ該表  
 には予備整備品目表、上陸作戦特別整備、基地整備用資材等の表  
 のつてゐる。かくの如き諸表または諸計画等は台湾攻軍作戦のた  
 に準備されたものを氷山作戦用に派用されたものである。

計画立案の最初の時期においては快用船舶数量の不足を告げたこ  
 は明らかであつた。戦闘及補給部隊並オ/次基地部隊に対する充  
 船舶は不足であつた。よつて某部隊には配当船幅を削減し、某部  
 隊は攻軍挿団の船幅を以てしては航空部隊の一部及早期入用の基地  
 整備資材を輸送する余積のないことが明らかになつた。そこで太平  
 方面最高指揮官に対しLST及LSMを多量に増加すること、軍



(26)

荷物の容積を削減すること、サイパンにおいて乗船する海軍建築工  
9ヶ隊のため速かにLSTを運送せんことを請求した。

攻軍諸隊とオノ次補給のための船編配きは各方面に十分な手持り  
あつたのでさしたる困難な問題はなかつた。

各部隊は乗船に際して糧食30日分緊急衣料と整備品燃料医薬品  
築資材を携行した。

最初の運業準備置は“太平洋方面最高指揮官”(CINCPAC)に  
て基盤とする。

(註。A CINCPACは中部太平洋の経験に基く彈薬の平均分數を  
示す。M1小銃—100発。3口径機南銃—1,500発。5口径機  
銃—600発。60mm 81mm迫車砲—275発。105mm榴  
弾砲—150—155mm榴彈砲—250発)

レイテにおけるオノXIV軍団は南西太平洋方面兵站機關の食糧  
至不十分なりしため所食の不足は沖繩に至りマリアナのオノ  
予備貯蔵の分よりLST2隻分の補正を受くることとした。

### (2) [新兵器]

今次各部隊に支給せる整備品中には従来対日戦に使用されな  
いものがあつた。新式火焰放射戦車(有効距離と火焰効力を増加  
)が交付された。各師団には赤外線による夜間視察のできる狙撃  
鏡、探照眼鏡140口が支給された。前者はガービン銃に照準  
で夜間射撃ができる。後者は手操作で夜間視察と信号用に供する。  
機銃と対空砲の地上射撃に用うる短期信管(VT)を交付したが、  
これは今次始めての事である。その他この作戦において新式迫車砲  
器、音響標定器具GR-6、57mm及75mmの無友動小銃、  
インム無友動迫車砲等の戰鬥実験を実施する。

### (3) [補給輸送]

西海岸より目的地に在る軍隊に対する補給のための船舶輸送は  
10隻の船団を以て実施する。搭載を了った船舶は太平洋の諸港よ

(27)

10日の間隔をもつて運航する。即ちL-40日(1945年2月2  
0日)運航を開始しL-5日以後逐次夫々の指定集合地たるウルスイ  
及びエニエックに到りバックナー將軍の命を待つ。これらの補給  
輸送はL+210日(10月31日)迄自動的に反復し、かくてこの  
期日までに予定しある全輸送の完了し得るのである。船舶の主なる添  
給予備はサイパンとグアムに控置せらる。

### (4) [基地の整備]

ニミッツ提督の意見によれば本作戰兵站業務の主眼は琉球の航空並  
海軍基地の急速整備により爾後の対日攻撃に協力するに在りと。沖繩  
の基地整備計画は太平洋方面最高指揮官より指示せらる。その大要は  
沖繩に9口の飛行場を建設し、その内の2口はL+5日には作戦に供  
用し得る如くする。その他水上機基地1口、中城湾の海軍基地、補給  
船舶のための那覇港の居住設備等である。基地整備としては、この  
他戦車大隊のための巨大な燃料貯蔵設備、水陸の揚陸設備、道路の充  
足改修を必要とし爾後更に道路、彈薬置場、病院、通信施設、給水組  
織、居住及び娯楽設備等の大規模な建設計画を遂行するを要する。浮  
島には前述航空基地を整備する。

琉球の基地整備の責務は、当初はバックナー將軍に任せられ次でオ  
ノ10軍の“基地整備計画”の実施は“沖繩高司令官”又は陸軍守備隊  
に継承される。“沖繩高司令部”の一部は攻軍師団と同行し上陸直後  
の兵站業務を担任する。上陸作戰段階の終末に伴い沖繩高司令官はオ  
ノ10軍の行政及兵站実行機關として司令部及び前線通信系の業務を管  
掌する。かくして基地整備は占領地業務及び攻軍地防衛と並行実施さ  
れる。守備軍用並基地整備用の資材は17個師団となつて沖繩に到着  
する。これは主として渡具如海岸の揚陸効理に基くものにして各師団  
の積載量は次の様面の到着までは揚陸をする如く船積りする要がある  
からである。これら守備隊の大部の集結地は西海岸及びオアフにして  
その一部は従来より南太平洋又はアリアナに在つた。

其の六 訓練及予行演習

オ10軍司令部下の諸隊は遼陽地帯に散在しあるを以て兩軍団を併して上陸する行動に關し統合演習または予行演習を実施する時間の裕はなかつた。併し機会を求めて諸部隊各々の訓練、各種の連合訓練、上陸戦、洞窟や山地に於ける特殊戦法に關する訓練を実施した。上部隊に対しては夜間狙撃眼鏡や夜間探照眼鏡の用法を訓練し又裝甲火砲放射大隊に改編された標準戦車大隊に対しその用法取扱いを訓練した。各種勤務部隊の大部は業務多忙なるが訓練の機会を得なかつたため特殊訓練の一部を実施し得たるに過ぎなかつた。

第XIV軍団が1944年12月今迄作戦に關して華前命令に接する時は、現にレイテに於いて激戦中であつた。軍団はその後も2/10日に至るまでは依然戦術的行動を執行し、その全部隊は集合地ユラグに集結し得たのは2月18日であつた。従つて新任務に關する訓練や予行演習は激戦直後の諸隊の戦力恢復と新作戰のための進展の進展との間の尙余の時間を利用されたのである。オ7、オ77、96師団は沖繩作戰のための緊急の特殊事項に就て訓練を実施し得るに過ぎなかつた。但し夜間狙撃法並火砲戦車の用法は全隊に普及せしめ得た。

軍団としてはオ7、オ97師団及南部上陸隊に属するその他の諸隊に対して3月15日~19日の間、レイテ港に於いて実弾を用うることなく全般予行演習を実施した。諸隊は上陸戦の技術の他岸壁の路網設やその攀登法を訓練した。兩師団の連隊攻軍団は上陸に引続き島地約1000碼に向う攻軍行動を実施し講評の後更に之を反覆しオ77師団は分離してレイテ港において1944年10月より出現したる1945年3月25日に亘り猛訓練を実施し3月20日~25日の間に4回の予行演習を実施した。

海兵師団は何れも沖繩作戰のため数ヶ月の訓練及予行演習を実施し得る状況にあつた。オ1海兵師団は訓練のためルッセル島は不慮の火災を以てガダルカナルに移動して1ヶ月に亘る訓練を実施した。ガダルカナル島の島上野戦砲、迫撃砲及小火器のため適当な射場を求め得た。

海兵師団はガダルカナル島に於て師団として幾多の訓練の他陣中勤務訓練をも併せ実施した。

オ2海兵師団はサイパンにおいて当時を以て日本軍の占領ありし高台を利用して實際的訓練を実施した。

オ3海兵師団はガダルカナルにおいて3月2日~7日、オ1、オ2師団の連合演習を実施し、全作戦経過を演習し、軍隊及び假想軍需品搬送し通信網を構築する等實際的綜合訓練を実施した。

の七 乗船搭載

攻軍隊の諸部隊の乗船搭載に關する責務は各乗船港港における指揮官の担任である。然しオアフからの異達はオ10軍司令部の命令に依り、オ1海兵軍団及びオXIV軍団長は南太平洋及レイテに在る夫々の確保部隊の乗船に關しその責に任ずる。

オ2海兵師団は部下部隊の乗船搭載及びサイパン出港について優先権を有する。

従来西海岸に在りし部隊は夫々指定の進港港に至り攻軍陣団に合す。全般の乗船搭載は“太平洋艦隊上陸部隊”の輸送指令に準據し、前關係にありてはオ10軍司令部の指令に依る。

各師団に対してはAPA(輸送船)15隻、AKA(貨物船)6隻、LST(輸送船)11隻、所要数のLST及LSMを配當せられ、その他師団及び軍(オ10軍)の所要の船泊を配當せらる(附表オ4)以上を以て輸送船11隻、貨物船47隻、LST184隻、LSM89隻を以て合派遣軍のため充當された。輸送船監督將校班を軍内諸隊に配當されその乗船と積裝の管理に任じ、海兵師団にありては、これらの將校は従來の作戰に従事したものをもつて充當された。

カーナー提督は別に戦車の積込みに慣熟しその指揮要領に精通した別班を編成し、この業務を援助せしめるため、レイテ、ガダルカナル、ルッセル島の西軍団及びエスピリットサンのオ27師団へ派遣した。

各船の積込みとその運航は各船長監督將校班同様の下に実施す。

第10軍司令部及びその隷属部隊の大部はハワイにおいて第7、第77、第96師団はレイテにおいて乗船し大部の船舶のみは同地において実施され各師団は置西の監督下に各この場敷した。レイテ東岸のドワラグ地区に於ける開放せる海岸の塔敷難であつた。即ち巻波と高潮のため積荷は多くはその用をなすTやLSMはできる限り海浜に近接し車輛は水中を涉り105mm砲はDUKWや平尾船によつて積込みを行つた。多くの母舟や揚舟艇は積込み開始の2月にはルソル作戦の需用に充てられたものに対し至急母舟の増加を請求した。積込作業は尙船舶の特性に同じの通報を欠いたため、滞滞を招いた新に到着する船舶から軍需品下し、海上において更に攻撃用船舶に搭載換へをするための時間を費した。

オⅢ海兵軍団及びその部隊はガダルカナル—ルッセル地区において発進努を整へた。

〔目標に向つ航路〕 攻撃目標に向つ進発は1945年3月1日である。この日慶良間群島の攻撃に任ずる諸隊を搭載せる低速トクター団は、レイテのサンペドロ港を出発し、オ77師団簡余のはその3日後は、同師団の残部は3月24日に夫々レイテを出発南部攻撃兵団に属するトクター船団は3月25日レイテを出発高運輸送船団は3日後れてこれに航行した。

レイテよりの航路は大要針度北北東(N E by N)にて沖縄南方00哩へ、次で針路北西北(N by N西)によつて直路目標に到る。

オⅢ海兵軍団の諸隊は3月12日ガダルカナル島を出航、21日スー、同地において軍需品の積込みを完了し攻撃部隊の上陸用移集に4日回を充てる。北部トクター船団は、3月25日カトーを出発する。陽動に任ずるオⅡ海兵師団のトラック団は同日パンを出航する。北部及南部攻撃隊及陽動部隊の残部は3月27日を出航する。この頃既に慶良間島においては米日両軍の地上戦がされる筈である。

## 第二章

アメリカ軍上陸迄の間に於ける日本軍(主として32A)の状況

### 第1節 第32軍の編成

昭和19年2月米機動部隊のトラック高空港に伴い大本營に於ては南西諸島及台湾方面に於ける作戦準備の促進を企図し同年3月下旬「10号作戦準備要綱」を策定した。

本作戦準備の目的は「南西方面我国土の防衛及南方國との交通確保の爲台湾方面より南西諸島方面に亘る作戦準備を強化し先づ敵の奇襲に備うると共に清野の要敵に方り敵の攻撃企図を盡碎し得るの態勢を整う」るに在つて、當時未だ殆ど無防備に近い該方面の戦備就中航空作戦準備を急進に促進せんと企図せられた。

第32軍は如上の作戦準備実行の見地より昭和19年3月下旬大本營直屬として新に編成され南西諸島に配置せられし阿軍は昭和19年4月1日其の統帥を発動した。

註、第32軍司令部は沖縄本島那覇市外に位置し軍司令官は陸軍中將渡辺正夫、軍參謀長は陸軍少將北川潔水であつた。

### 第2節 作 戦 準 備

軍の作戦準備は昭和19年4月1日軍統帥の発動以來昭和20年3月下旬戦斗開始迄の滿1ヶ年間に於て太平洋作戦の進展に伴い其の規模内容層々飛躍的に進改せられた今之を概観すれば軍統帥発動後よりマリアナ線前線の昭和19年7月上旬迄即10号作戦準備期間を作戦準備第1期、爾後同年11月中旬に至る迄即援写作戦準備期間を作戦準備第2期、更に戦斗開始に至る迄即天号航空作戦準備期間を作戦準備第3期に大別し得

以下該区分に従い軍の作戦準備の概略を記述する。

#### 第1期(10号)作戦準備

本期間は所謂鉄壁陣地線と稱せられたマリアナ線を主陣地帯とし南西諸島線は後方陣地的意義を有した時期で作戦準備の方針は10号作戦

(32)

準備要綱に基づき航空作戦準備を主とし地上作戦準備を従としたのである。

A. 10号作戦準備要綱

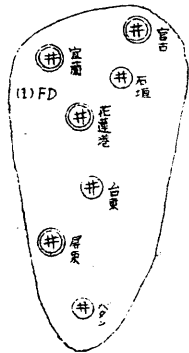
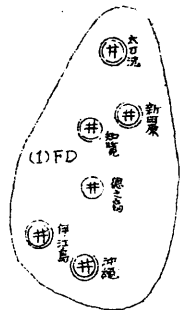
本要綱の目的は前記の如く其の実施要領の骨子は次の通り

(1) 航空作戦準備

1. 台湾東岸地区より南西諸島に亘り数個の航空基地(基地は兵力集約した数個の飛行場を以て編成)を並列配置し之を基盤とする航空作戦の遂行を容易にする。

作戦準備の規模は南西諸島、台湾東部各々約1飛行師団の展開及作戦を可能ならしむるを旨とする。

ロ. 航空基地配置の一案次の通り



ハ. 航空基地の設定は南西諸島に在つては32軍、台湾に在つては台湾軍之に在るを本則とする

ニ. 航空基地設定に於つては各基地毎に先核飛行場を急速完成する

ホ. 航空資材の集積は7月迄に約2飛行師団月分次で約1飛行師団月分と予定する

(2) 地上兵力の運用

地上兵力は航空基地の防備を主とし併て主要なる艦船泊地を掩護する如く配置する。

B. 軍の作戦準備実施

軍が任務に基づき計画実施せる作戦準備の要は次の通り

(1) 航空作戦準備

徳之島

第1. 第2飛行場

第一飛行場は昭和18年末以来航空本部に既に設定に着手しあり軍は之が作業を

(33)

承した。

伊江島、中西飛行場、石垣本島、北、中、南東飛行場

伊江島、沖縄北西飛行場は昭和十八年以來航空本部に於て既に設定に着手しありて軍は之が作業を継承

古島、東、中、西、飛行場

石垣島

石垣島飛行場

以上各飛行場は大本営命令に基づき昭和十九年七八月頃迄に撤改すべし予定なりしも飛行場設定に尤告せる諸部隊は殆ど全部の設定専向の部隊にあらず。而も満洲、内地等より派遣せられたる要基部隊の現地展開は五月以後となり、且輸送途中一部撤改せるものを注する等事情に因り軍官兵(一日平均約五万の島民を使用せり)の努力に依り航空基地設定作業は必ずしも予期の如く進捗せず。

カ. 地上作戦準備

軍被下の地上作戦兵力は劣弱にして軍に敵小艦艇の奇襲攻撃に對し新場、港灣等を直接警備し得るに過ぎず其の展開部署の概略左の如し。

大東島地区

大東島地区(歩兵約一聯隊)

四月下旬主力を以て南大東各一部を以て北、沖大東島に展開す。

奄美群島地区

奄美守備隊(独立混成才二十一聯隊、重砲兵才六聯隊(奄美大島重砲兵聯隊を改称す)基幹)

五月下旬主力を以て徳之島各一部を以て喜界島、奄美大島、沖水長部及与論島に展開す。

沖縄本島地区